

# あまんじゃこのいたずらがし

「大人」の子孫らしいあまんじゃこは、いつもいたずらをしては喜んでいました。

## 【いたずらその1】

中区の真ん中あたりに太子山と丘山というあわんをふせたような形の2つの山が並んでありました。

ある日、あまんじゃこはこの2つの山を動かして、里の人たちを驚かそうと思いました。

そこで、2つの山を天秤のようにつりあげてうごかそうと長い石の棒をさがしてきました。その石を天秤棒にしてつりあげようとする、ポキンと折れてしまいました。



丘山と太子山（中区）

時が流れて、村の人たちが村の中を流れる川を掃除していたらその折れた石の一部を見つけたと伝えられています。それが、奥中に残っている「長石」のいわれです。



あまんじゃこの長石（中区奥中）

## 【いたずらその2】

ある日の夕方、里の子どもたちが夕焼けの空を見ながら「妙見山と笠形山に虹のような橋がかかったらきれいやろな」と話しているのを耳にしました。「あまんじゃこやったら、大きいて力持ちやから橋がかげられるかもしれへんな」「なんぼ大きいてすごい力持ち言うても、あかんあかん」。

それを聞いたあまんじゃこは「何やて、わしにてけへんことあるやて、そんなことあるかい」、「見とれ、一晩のうちに橋をつかって、びっくりさせたる」。

暗い中、石をつかって土台をつくりました。そして、橋となる長い木をさがしましたが見つかりません。そこへふくろうがやってきて「どんがり山へ行ってみな」と教えてくれたのですが、そこはあまんじゃこ、反対の方に行ってしまう。どうも見つからないまま朝になり、あわてて姿をかくしてしまいました。



あまんじゃこの腰掛石（中区曾我井）

橋をつくらせていた笠形山には石の土台になったと伝わる石柱があります。あまんじゃこが一休みするために腰をかけたという石も残っています。この石に座りながら、「次はどんないたずらをして里人をあどろがそうかな」と考えていた

かもしれませんね。（参考『中町誌』昭和29年発行）



あまんじゃこの石柱（笠形山登山道）

# OH! TAKA 風土記

昔、大人（おおひと）がいました。

この大人が、南の海から北の海へ、さらに東に巡行したときに、この土地にやってきて言いました。

「ほかの土地は低かったので頭がいつも天につかえるから、身をかがめて歩いたけれど、この土地は天が高いので、体を伸ばして歩ける。高いなあ〜」。

そこで、この地を託賀郡（たかのこおり）というようになりました。また、大人の踏んだ足跡は、たくさんの沼となりました。

\*『播磨国風土記』託賀郡条より（現代語訳）

託賀郡一多可郡

## ふ ど き 風土記とは



古代播磨国と託賀郡

元明天皇の時代、和銅6年（713）5月2日に、諸国に向けてある命令が発せられました。

「郡郷（里）にふき名前を付けよ。鉱物・植物など郡内の特産品や土地の肥沃さ、地名の由来や古老の伝える旧聞・異事を（朝廷に）報告せよ」という命令です。諸国から提出された報告書（解）は、後に『風土記』と呼ばれるようになりました。

現在、その写本が伝えられ、1300年前の姿を知ることができる国は、常陸国・出雲国・肥前国・豊後国、そして播磨国のわずか5カ国だけです（後の書物に引用された「逸文」が残るのは20数カ国ほど）。

その頃の播磨国には12の郡（こおり）がありました。その内10郡の記述が残っています。その一つに託賀郡（現在の多可町～西脇市周辺）があります。



荒田村 (加美区南部～中区北西部)

あるとき、この地にいらっしやる道主日女命 (みちぬしひめのみこと) という神様が、父親がいないのに子どもをお産みになりました。



東から「荒田村」方面を望む

そこで、父親が誰かを見分けるため、儀式(「盟酒」:うけいざけ)を行うことになりました。儀式に使うお酒をつくるために、七町の田を作ったところ、七日七夜のうちに稲が実り、お酒ができました。多くの神様を集めて、生まれた子どもに父親である神様にお酒を捧げせると、天目一命 (あまのみひとつのみこと) に捧げたので、天目一命が父親だとわかりました。

後に、酒米をつくった田は荒れてしまったので、荒田村と名付けられました。

荒田神社 (加美区的場)

『播磨国風土記』にはこの地域の神社名は出てきませんが、「荒田」という地名を冠し、播磨二宮とも呼ばれる荒田神社が『播磨国風土記』にゆかりの深い神社だとされています。



荒田神社

坂上田村麻呂の崇敬を受けたという伝承をはじめ、「式内社」としても早くから歴史に登場し、この神社に近接する丘の上には天目一命を祀る「天目一神社」も鎮座しています。

現在のご祭神は、少彦名命 (すくなひこなのみこと)、木花開姫命 (このはなさくやひめのみこと)、素戔嗚尊 (すさのおのみこと) の三神ですが、古くは道主日女命と天目一命の夫婦神が祀られていたとも考えられています。

花波山 (八千代区 脇田山)

花波山は、近江の国の花波之神 (はななみのがみ) がこの山にいらしたのが花波山と名付けられました。

※「花波山」は託賀郡法太里 (ほうだのさと) に記載されており、八千代区中野間には「花ノ宮」という地名が残っています。また、丹波と播磨の国境として記されている「斐坂 (みかさか) は、西脇市と加西市の境の「二ヶ坂」が遺称地とされています。



花波山



託賀郡  
賀眉里



賀眉の里

土地の肥沃さは下の上です  
この里は杉原川の川上にあるので、「賀眉里」と名付けました

大海山 (中区 妙見山)

大海 (おおみ) という名がついたわけは、昔、明石郡大海の里の人がやってきて、この山のふもとに住んでいたのが、大海山といえます。松が生えています。

※妙見山のふもとには、県内最大級の石室を持つ東山古墳群 (6世紀後半～7世紀半ば頃) が位置しています。のちの「託賀郡」を運営していたリーダーたちの古墳と考えられます。『播磨国風土記』にある、「大海山のふもとに住んだ」人々なのかも・・・。



大海山 (妙見山) と東山古墳群

天目一神社 (加美区的場)

荒田神社の西北の丘の上にある小社。「めひとつさん」と呼ばれて親しまれており、4月にはお祭りが行われます。



天目一神社

天目一命は、町内では他に、山寄上 (やまよりがみ)・青玉神社、鳥羽 (とりま)・青玉神社、清水 (きよみず)・西宮神社で主祭神として、鍛冶屋 (かじや)・大歳金比羅神社、間子 (まこ)・加都良神社では摂社として祀られています。